

研究目的

本欄には、研究の全体構想及びその中で本研究の具体的な目的について、冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述した上で、適宜文献を引用しつつ記述し、特に次の点については、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください（記述に当たっては、「科学研究費助成事業における審査及び評価に関する規程」（公募要領 75 頁参照）を参考にしてください。）。

- ① 研究の学術的背景（本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ、応募者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯、これまでの研究成果を発展させる場合にはその内容等）
- ② 研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか
- ③ 当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

研究目的（概要）

本研究の目的は以下の 2 点である。

- [1] 南北 16 地点の琉球諸方言を対象に、焦点助詞（いわゆる係助詞ドウ、ガなど）による焦点標示の方言バリエーションの詳細な記述を行う。
- [2] 上記の記述データをもとにした焦点標示に関する類型化を行う。

データは申請者自身の現地調査で得られるデータを中心にするが、申請者があらかじめ作成した調査票を研究協力者に依頼し、研究協力者の現地調査で得られたデータも使用する。

① 研究の学術的背景**【全体的な研究動向】**

琉球諸方言は、本土方言のほとんどがすでに失った係り結びが現在でも活発に用いられるとされ、国内外の方言研究者、日本語研究者、歴史言語学者の関心を集めてきた。係り結びを、焦点助詞（係助詞）による文中要素への焦点標示と、それに応じた述語の活用形式の制限（呼応関係）の 2 つの要素に分けるとすれば、これまでの琉球諸方言研究において圧倒的な注目を集めてきたのは呼応関係のほうであった（例えば内間 1985）。なお、焦点助詞が述語形式を決めるという従来の呼応関係の考え方に疑義を呈し、逆に文のモダリティが焦点助詞の出没を決定するという研究（かりまた 2014、Shimoji 2011）もあるが、これらもまた述語形式と焦点助詞の関連を扱う呼応関係の研究史に位置づけられる。呼応関係の研究史において注目されてきた事実は、北琉球の多く（特に奄美）では述語形式に連体・終止・係り結び形の 3 種の区別があり、呼応関係がはっきりしている一方、南琉球（特に宮古）では上記 3 述語形式がすべて同形であり、呼応関係が消失しているという方言間バリエーションである。

しかし、この呼応関係に関する研究史には重要な見落としがある。すなわち、南琉球では焦点助詞が 1 つの文にほぼ義務的に生じるほどよく使われる一方、北琉球では焦点助詞の使用頻度が低いという、焦点標示の出現そのものの南北方言差である。この事実は係り結びの方言差を語るうえで極めて重要な事実であるが、呼応関係中心の研究動向においてはなかなか議論の中心を占めるまでには至っていない。

【本研究の着想に至った経緯】

申請者は、上記の焦点助詞の使用に関する南北差をより明確に記述するため、南北 4 方言（北琉球奄美浦方言・湯湾方言、南琉球宮古伊良部方言・与那国方言）を対象に予備調査を行った（その結果は下地 2015 として発表）。まず、これまでの研究にない手法として、情報構造の観点から、焦点タイプを区別し、焦点タイプと焦点助詞の出現の関連を探った。これまでの琉球諸方言の研究において焦点標示の例を考察する際、必ず用いられる例は疑問詞疑問文とそれに対する応答（「誰が来たの?」「太郎が来た」のような例）であるが、焦点タイプに関する情報構造理論（Lambrecht 1994）や言語類型論的研究（Givón 1990 など）が示すように、焦点タイプは上記の 2 つ（下地 2015 ではそれぞれ WH 焦点、WH 応答焦点）以外に、「次郎ではなく太郎が来た」のような対比焦点や、文全体が焦点領域にあるような文焦点（例：「どうしたの?」→「太郎が来た」）もある。

これらの焦点タイプのうち、対比焦点・WH 焦点・WH 応答焦点に注目して焦点助詞の出現を調べた結果、明確な南北差が現れた（次ページ図 1）。例えば南琉球宮古方言では焦点タイプに関係なく焦点助詞の使用（図 1 では F で標示）が可能だが、北琉球の奄美大島浦方言では対比焦点の場合に限定して使われる。

〈参照文献リストは 4 ページにまとめて記載〉

なお、調査を進める過程で、同じ焦点タイプでも動詞述語・非動詞述語文の別によって焦点助詞の使用の可否が変わる場合があることがわかった。図 1 で、スラッシュの左は動詞述語文、右は非動詞述語文を示す。よって、奄美湯湾方言の WH 応答焦点に関して、焦点助詞は動詞述語文にのみ使用できる。

図 1 で示す事実は、これまでの琉球諸方言研究の前提であった「焦点標示といえは WH (応答) 焦点」という図式を根底から覆すものであると同時に、先に【全体的な研究動向】で述べた、北琉球方言で焦点助詞がなかなか使われないという経験的事実を理論的に説明できる可能性を示している。

予備調査では、焦点助詞が使用できない焦点タイプにおいてどのような焦点標示がなされるかについても考察を行った。その結果、焦点助詞の使用が限定的な奄美諸方言について、焦点助詞が使用できない焦点タイプにはガ格による焦点標示機能が一部みられることがわかった。今後、調査対象地域を広げ、焦点助詞による焦点標示とガ格による焦点標示の相補的な分布がみられるかを検証する必要がある。これは、ガという格助詞の機能の解明においても必要なことであり、琉球諸方言研究だけでなく日本語研究、日本語史研究に対しても貢献が期待できる。

② 何をどこまで明らかにしようとするのか

上記①の予備調査で明らかにした事実を、より多様な方言に関して確かめる必要がある。また、焦点助詞の使用に関して述語タイプも関与していることが予備調査で明らかになったものの、調査当初は予想していなかったことであり、今後述語タイプについても注意を払う必要がある。

これを踏まえ、本研究では、調査地点を 16 地点 (次ページ参照) に拡大し、南北まんべんなく考察対象にしたうえで、現地調査を中心に据えて、以下の 2 点に絞って研究を行う。

- (a) 焦点タイプ・述語タイプと焦点標示の関連を考察する。
- (b) 主語への焦点標示に注目し、焦点標示と格標示の関連を考察する。

③ 特色・独創的な点および予想される結果と意義

本研究の最大の特色は、これまでの琉球方言研究が焦点助詞の分布を記述する際に区別しなかった焦点タイプと述語タイプを明確に区別したうえで、単に焦点助詞を「持つか否か」ではなく、「どのような焦点タイプ・述語タイプに焦点助詞が使えるか」という、分布に関する制限を考慮し、明確に類型化する点にある。

予備調査の結果をもとにすると、本研究によっておおまかに以下の結果が予想される。

- (a) 焦点助詞が使いやすい焦点タイプと、焦点助詞の使用が制限される焦点タイプがある。
- (b) 述語タイプも、焦点助詞が使えるかどうかに関与的である。
- (c) ガ格による焦点標示機能は、焦点助詞の分布の制限が強い環境においてより明確にみられる可能性が高い。

上記の予想は、本研究の結果によって大きく修正されることはないと思われるが、研究の進展によって、精密化および理論的深化が可能であると思われる。例えば(a)に関して、図 1 の 4 方言の結果だけをもとにすると、きれいな階層性がみられる。すなわち、対比>WH 応答>WH という順で焦点助詞の使いやすさが減じる傾向がみてとれる。一方、述語タイプについても、動詞述語 > 非動詞述語の階層性がみられる。複数の研究者に聞くと、この階層性はほかの方言でも適用できる可能性が高い。この階層性が、本研究による大規模調査で裏付けられれば、その後の研究課題を次々に生みだしていくはずである。例えば、焦点タイプの階層化が可能になれば、階層の左側の焦点タイプから焦点助詞が生じ、右側に広がったという琉球方言の通時発達過程の仮説につながり、さらに日本語史・日琉祖語研究における焦点標示の研究をも刺激するであろう。

このように、本研究の意義は、これまで琉球方言研究において係り結び研究の傍流に位置づけられてきた焦点標示の研究に全く新しい視点から取り組むことにより、琉球方言研究のみならず情報構造理論・類型論・日本語史研究に大きく貢献する点にある。

〈参照文献リストは 4 ページにまとめて記載〉

	対比 焦点	WH 応答 焦点	WH 焦点
宮古伊良部	F/F	F/F	F/F
与那国	F/F	F/F	
奄美 (湯湾)	F/F	F/	
奄美 (浦)	F/		

図 1. 焦点タイプと焦点助詞の使用可能性
(F: 焦点助詞使用可; 動詞述語/非動詞述語)

研究計画・方法

本欄には、研究目的を達成するための具体的な研究計画・方法について、冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述した上で、平成28年度の計画と平成29年度以降の計画に分けて、適宜文献を引用しつつ記述してください。ここでは、研究が当初計画どおりに進まない時の対応など、多方面からの検討状況について述べるとともに、次の点についても、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。

- ① 本研究を遂行する上での具体的な工夫（効率的に研究を進める上でのアイデア、効率的に研究を進めるための研究協力者からの支援等）
- ② 研究計画を遂行するための研究体制について、研究代表者及び研究協力者（海外共同研究者、科研費への応募資格を有しない企業の研究者、その他技術者や知財専門家等の研究支援を行う者、大学院生等（氏名、員数を記入することも可））の具体的な役割（図表を用いる等）
- ③ 研究代表者が、本研究とは別に職務として行う研究のために雇用されている者である場合、または職務ではないが別に行う研究がある場合には、その研究内容と本研究との関連性及び相違点
なお、研究期間の途中で異動や退職等により研究環境が大きく変わる場合は、研究実施場所の確保や研究実施方法等についても記述してください。

研究計画・方法（概要）

本研究は3年計画である。1年目は調査票の作成と現地調査（4回）を行い、2年目は現地調査（4回）を行うとともに、研究協力者によるデータ収集を依頼する。3年目は、2年目までに収集できなかったデータの追加調査（多くても2回まで）と調査結果のとりまとめを行う。

本研究で扱う方言は以下の通りである（下線は申請者が現地調査予定、*はすでに予備調査において予備調査済）。北琉球8方言（喜界島方言、*奄美大島浦方言、*奄美大島湯湾方言、徳之島方言、沖永良部方言、与論方言、本島北部方言、本島中南部方言）、南琉球8方言（*宮古伊良部方言、多良間方言、石垣宮良方言、黒島方言、白保方言、波照間方言、西表祖納方言、*与那国方言）。下線がない方言は、その方言を専門にしている研究協力者にデータ収集を依頼する。

【平成28年度：調査票の作成と北琉球方言の現地調査】

現地調査：北琉球8方言のうち、奄美浦方言と湯湾方言（予備調査で経験済）、与論方言、沖繩本島中南部方言の4方言を調査する。調査は長期休暇中に行い、1回につき5日程度、計4回行う。具体的な調査対象地点は確定しており、話者とも面識がある。さらに、後述する調査票についても、何をどれだけ調べればよいかはすでにわかっており、その量も限られる。よって、各方言について1回の現地調査（約5日）で十分にデータの収集が可能であると予想される。

調査票：予備調査でひな形を作成済であり、4地点の調査を経て修正を重ねている。よって、本研究で作成すべき調査票のデザインについて申請者は完全に把握している。調査票作成にあたって考察すべき焦点タイプは対比焦点・WH応答焦点・WH焦点であり、述語タイプは動詞述語文・形容詞述語・名詞述語文を区別する。焦点化される要素は主語・目的語・副詞・述語など多数あるが、本研究では文の必須要素（主語と目的語）に絞って考察する。これにより、分析がしやすくなるだけでなく、調査内容を絞ることで16地点の調査を期間内に完了することが確実になる。

なお、主格のガに焦点標示機能かどうかという問題は、琉球諸方言の主語の格の体系を理解したうえで取り組む必要がある。申請者は、この問題について研究業績があり（研究業績番号2, 5, 6, 7）、東京外国語アジアアフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーケティング」の研究代表を務めている。よって、琉球諸方言の主格の事情については十分に把握しており、それにもとづいた調査票の作成が可能である。具体的には、琉球諸方言の主格は、これまでよく知られてきた主語名詞句の有生性（代名詞、固有名詞、親族名称の一部はガ、それ以外はヌ）に加えて、上でみた述語タイプ、さらに動詞述語文に関して自動詞文と他動詞文を区別する必要がある。

以上をまとめる。調査票は、①焦点タイプ（対比焦点・WH焦点・WH応答焦点）、②焦点化の要素（主語・目的語）、③述語タイプ（動詞述語・形容詞述語・名詞述語）、④他動性（自動詞・他動詞）、⑤主語の有生性（本来ガをとる名詞句と本来ヌをとる名詞句）、を変数として作成する。例えば「アキラではなく犬が走っている」「犬ではなくアキラが走っている」のような翻訳用例文ペアは、①対比焦点、②主語焦点化、③動詞述語、④自動詞までは同じだが、⑤の有生性のみ異なる。このように、調査例文は和文で作成し、これを翻訳してもらう形式をとる。予備調査によって、翻訳だけでは取りにくい例文については、画像や絵を使用することを考えているが、予備調査の結果、本研究で扱う焦点標示に関する例文調査は文脈依存度が低く、調査者にとってコントロールしやすく、話者にとっても翻訳しやすい。合計70~80程度の例文調査票になり、これまでの経験上、3日程度、長く見積もっても5日程度の調査で完了することができる。

研究成果発表：調査結果の中間報告として、年度中に日本方言研究会で発表を行う。

【平成 29 年度：南琉球方言の現地調査と研究協力者の派遣によるデータ収集】

本年度は南琉球の調査を行うとともに、すでに作成・修正を終えている調査票を研究協力者に渡して、それぞれの調査地でデータを収集してもらう。

現地調査：申請者は 28 年度と同様、長期休暇を利用して年 4 回調査を行う。現地調査は南琉球 8 方言のうち、宮古伊良部方言、石垣宮良方言、波照間方言、与那国方言の 4 方言を対象に行う。このうち、宮古伊良部方言と与那国方言については申請者が長年取り組んでいる方言であるため、調査地探し・話者探しなどの手間はかからない。宮良方言・波照間方言については、それぞれの専門家（XXXXXXXXXX）と日ごろから密接な交流があるため、一緒に調査に行ってもらえるなどのサポートを期待でき、また内諾を得ている。よって、各方言について 1 回の現地調査（約 5 日）で十分にデータの収集が可能であると予想される。

研究協力者派遣：現地調査（北琉球 4 方言、南琉球 4 方言）でカバーできない 8 方言について、その地域の専門家に依頼し、調査票を用いた調査を行ってもらう。現時点で、以下の方々に研究協力者になっていただくことを予定している。

徳XXXXXXXXXX

これら 8 方言それぞれの専門家は当該地域における調査経験が豊富であり、当該方言に関して最も信頼できるエキスパートである。よって、本研究の依頼に応じて速やかに、かつ効率よく、かつ信頼度の高い調査を行うことが可能である。また、ここで挙げた研究協力者のうち、金田氏を除く全員が、申請者が代表を務める琉球諸語記述研究会のメンバーである。金田氏とは、現在進行中の科研基盤 A や、応募中の基盤 S の分担者として密接な交流がある。したがって、これらの研究協力者と個人的に頻りに連絡をとりあって研究打ち合わせを行うことが可能であり、実際にそれを予定している。本申請書 8 ページでも述べるように、研究協力者の協力をあおいで 8 地点の調査を期間内に完遂することは十分に可能である。

なお、8 方言の調査を 29 年度に行うことができない場合に備え、28 年度から 30 年度に分散する可能性もあるが、その場合、30 年度の夏休みまでに終了するよう調整する。それにより、研究成果のとりまとめが確実に 30 年度に完了するはずである。

研究成果発表：前年度と今年度の調査結果の中間報告として、日本言語学会で発表を行い、年度末をめぐりに日本方言研究会機関誌『方言の研究』に投稿を行う。

【平成 30 年度：補完調査と研究成果のとりまとめ】

本年度は、これまでに収集したデータをもとに分析を行って研究成果をとりまとめることに集中するが、必要であれば前年度までに収集できなかったデータを再度収集する目的で現地調査を 2 回を上限として行う。

研究成果発表：まず国内向けに、日本語学会で発表を行い、『日本語の研究』に投稿を行う。国外向けに、情報構造理論・類型論的な観点から、琉球諸方言の焦点標示の特徴を論じ、国際学会での発表 (Association for Linguistic Typology) を目指す。最終的には、その学会発表をもとに Studies in Language 誌への投稿を行う。

<ここまでの参考文献>

- 内間直仁(1985)「係り結びのかかりの弱まり」『沖縄文化研究』11: 223-244.
 かりまたしげひさ(2011)「モーダルな文のタイプと焦点助辞」『日本東洋文化論集』17: 1-26.
 下地理則(2015)「焦点化と格標示」第 151 回日本言語学会ワークショップ発表資料.
 Givón, Talmy (1990) *Syntax: a functional-typological introduction (ii)*. Amsterdam: Benjamins.
 Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form: topic, focus, and the mental representations of discourse referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Shimoji, Michinori (2011) Quasi-Kakarimusubi in Irabu. *Japanese/Korean Linguistics* 18: 114-125.

研究業績

本欄には、これまでに発表した論文、著書、産業財産権、招待講演のうち、本研究に関連するものを選定し、現在から順に発表年次を過去にさかのぼり、発表年（暦年）毎に線を引いて区別（線は移動可）し、通し番号を付して記入してください。なお、学術誌へ投稿中の論文を記入する場合は、掲載が決定しているものに限りま

なお、研究業績については、主に2011年以降の業績を中心に記入してください。それ以前の業績であっても本研究に深く関わるものや今までに発表した主要な論文等（10件以内）を記入しても構いません。

- ① 例えば発表論文の場合、論文名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）について記入してください。
- ② 以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。著者名が多数にわたる場合は、主な著者を数名記入し以下を省略（省略する場合、その員数と、掲載されている順番を○番目と記入）しても可。なお、研究代表者には下線を付してください。

2015 以降

- 1) Shimoji, Michinori (2016) Aspect and non-canonical object marking in the Irabu dialect of Ryukyuan. In Kageyama, Taro, and Wesley Jacobsen, eds., *Valency and Transitivity Alternations: Studies on Japanese and Beyond*, ページ未定, Berlin and New York: Mouton de Gruyter. 査読有
- 2) 下地理則(2016)「南琉球与那国語の格配列」田窪行則・ホイットマンジョン・平子達也編『琉球諸語と古代日本語』, ページ未定, 東京: くろしお出版, 査読有
- 3) Heinrich, Patrick, Miyara Shinsho and Michinori Shimoji (eds.2015) The handbook of the Ryukyuan languages, Berlin and New York: Mouton de Gruyter, 査読有
- 4) Yamada, Masahiro, Thomas Pellard and Michinori Shimoji (2015) Dunan. In Heinrich, Patrick, Shinsho Miyara and Michinori Shimoji, eds., The handbook of the Ryukyuan languages, Berlin and New York: Mouton de Gruyter, 査読有
- 5) 下地理則(2015)「琉球諸方言における有標主格と分裂自動詞性」『方言の研究』 1(1): 103-132, 査読有
- 6) 下地理則(2015)「南琉球与那国方言における活格性と活格類型論における位置づけ」日本語文法学会 16 回大会招待講演 (学習院女子大学). 査読なし

2014

- 7) Shimoji, Michinori (2014) A syntactic description of Yonaguni Ryukyuan: with a special focus on alignment and case-marking. *Shigen* 10: 81-106, 査読有
- 8) 下地理則・ハインリッヒパトリック編(2014)『琉球諸語の保持を目指して』東京: ココ出版, 査読なし

2013

- 9) Shimoji, Michinori (2013) Mermaid Construction in Irabu Ryukyuan. Tsunoda, Tasaku, ed., *Adnominal Clauses and the "Mermaid" Construction: Grammaticalization of Nouns*, 179-220, Tokyo: NINJAL, 査読なし
- 10) Shimoji, Michinori (2013) Clitics in Irabu Ryukyuan. 『国際沖縄研究』 4(1): 51-80.
- 11) 下地理則(2013)「危機方言研究における文法スケッチ」田窪行則編『琉球列島の言語と文化』45-80, 東京: くろしお出版, 査読なし

研究業績 (つづき)

2012

- 12) Shimoji, Michinori (2012) Northern Ryukyuan. In Tranter, Nicholas, ed., *Languages of Japan and Korea*, 351-380, London: Routledge, 査読有

2011

- 13) Shimoji, Michinori (2011) Irabu Ryukyuan. In Yamakoshi, Yasuhiro, ed., *Grammatical sketches from the field*, 79-136, Tokyo: ILCAA, 査読有
- 14) Shimoji, Michinori (2011) Quasi-Kakarimusubi in Irabu. *Japanese/Korean Linguistics* 18: 114-125, 査読有
- 15) ハインリッヒパトリック・下地理則編(2011)『琉球諸語記録保存の基礎』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 査読なし

2010 以前 (10 件を抜粋)

- 16) Shimoji, Michinori, and Thomas Pellard, eds. (2010) *An introduction to Ryukyuan languages*. Tokyo: ILCAA, 査読あり
- 17) 下地理則(2010)「琉球諸語に活用型形容詞は存在するか？伊良部島方言の場合」『国際沖縄研究』1(2): 21-31, 査読なし
- 18) 下地理則(2009)「南琉球宮古伊良部島方言の m 語尾終止形の機能」『琉球の方言』34: 193-208, 査読なし
- 19) 下地理則(2009)「アジア型副動詞の談話機能と形態統語論」柴崎礼士郎編『言語文化のクロスロード』, 85-110, 沖縄：文進印刷, 査読なし Shimoji, Michinori (2009) Foot and rhythmic structure in Irabu Ryukyuan. 『言語研究』135: 85-122, 査読有
- 20) Shimoji, Michinori (2009)The adjective class in Irabu Ryukyuan. 『日本語の研究』5(3): 22-40, 査読有
- 21) 下地理則(2009)「伊良部島方言における述語部分の焦点化について」『地球研記述言語学論集』2:115-133, 査読有
- 22) Shimoji, Michinori (2009) Epistemic modality in Irabu Ryukyuan. *Shigen* 5: 25-42, 査読なし
- 23) 下地理則(2009)「伊良部語におけるコピュラ文の構造」『地球研記述言語学論集』1: 67-82, 査読なし
- 24) Shimoji, Michinori (2008) Descriptive units and categories in Irabu. *Shigen* 4: 20-40, 査読なし
- 25) 下地理則(2008)「伊良部島方言の動詞屈折形態論」『琉球の方言』32: 69-114, 査読なし